

2010年度 第1回 文学部FD研究会

テーマ：カリキュラム・チェックリストの効用と課題
——学生が“学び”を実感できる教育の実現をめざして（1）——

タイムテーブル：

16：30 開会

CCLと3つの方針について 安藤 徹（文学部FD活動推進委員会委員長）

16：45 教員アンケートの結果について 市川 良文（文学部FD活動推進委員会副委員長、
同カリキュラム・ワーキンググループ代表）

17：00 ディスカッション

17：45 閉会

主催：文学部FD活動推進委員会

***アンケートにご協力ください。**

記入済のアンケートは、退室時に回収箱にご投函ください。

文学部では、学部の教育活動にかんする情報交換や認識を共有する場として、2007年度より「文学部FD研究会」を開催し、FD（ファカルティ・ディベロップメント）にかんするさまざまなテーマを取り上げています。なお、本研究会は「FD報告会」（大学教育開発センター共催）を兼ねており、学内に広く公開します。

◎第2回FD研究会の予定（詳細が決定次第、改めてご案内いたします）

日時：2010年11月24日（水）16:30～18:00

会場：大宮学舎西翼2階大会議室

テーマ：初年次教育について（仮）

——学生が“学び”を実感できる教育の実現をめざして（2）——

カリキュラム・チェックリストと3つの方針について

文学部FD活動推進委員会
委員長 安藤 徹

1. ディプロマ・ポリシー(DP)とカリキュラム・ポリシー(OP)

(1)なぜいま、“ポリシー”なのか

- ①教育の実施や卒業認定・学位授与に関する方針(カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシー)を明確にし、教育課程の改善や「出口管理」の強化を図ることも求められる。
(中央教育審議会〔2005〕)
- ②今日の大学教育の改革は、国際的には、学生が修得すべき学習成果を明確化することにより、「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」に力点が置かれている。
(中略)個々の大学が掲げる教育研究上の目的や建学の精神は、総じて抽象的であり、学士課程で学生が身に付けるべき学習成果を具体化・明確化していこうとする動向に照らしても曖昧であると言わざるを得ない。したがって、学位授与の方針として、教育課程の編成・実施や学修評価の在り方を律するものとは十分になり得ていない。
(中央教育審議会〔2008〕)
- ③教育・学生支援機構長の柳澤康信教育担当理事は「達成すべき目標とそのための組織、カリキュラムをどの程度整備しているかということが、今後、厳しく問われるだろう。ポリシーの一貫性構築は、遅かれ早かれすべての大学が取り組まなければならない課題だ」と強調する。
(愛媛大学〔2008〕)

(2)ディプロマ・ポリシーとは何か

①【大学に期待される取組(抄)】

- ◆大学全体や学部・学科等の教育研究上の目的、学位授与の方針を定め、それを学内外に対して積極的に公開する。
その際、それらが抽象的な記述にとどまらず、学生に身に付けることが期待される学習成果を重視する観点から、具体的で明確なものとなるように努める。
- ◆学位授与の方針の策定に当たって、PDCAサイクルが稼動するようにする。
(中央教育審議会〔2008〕)

②ディプロマ・ポリシーとは、学部・学科の教育の目的に、具体的に要請すべき人材像が示されたものである。また、授業の到達目標とは、シラバスの中に、それぞれの授業において学習後に保証する具体的な能力や知識、技能が示されたものである。(中略)教養の範囲を明確にしつつも専門教育の目的も併せて学士課程教育全体のディプロマ・ポリシーとして機能させれば、ディプロマ・ポリシーの数はせいぜい10個前後となることが予想される。 (沖〔2007〕)

③めざすべき人材像は、到達不可能なものであって構わない。しかし、DPは大学が教育活動の成果として学生に保証する最低限の能力を記載したもの(卒業時の到達目標)であり、卒業判定にも使用されるので、現実的で客観的評価が可能なものではない。(中略)／DPは教育課程の編成主体である各学部・学科が策定し、公表しなければならないものだが(大学設置基準第二条の二)、全学的に形式と内容に一体感を持たせるため、DPを記載するにあたって、次のようなルールを定めるとよい。／学生が卒業時に期待されている行動を明確に読み取ることができるようにするためには、①学生を主語とする、②文末には行為動詞を用いる、③一文に複数の行為動詞を

混ぜない。／愛媛大学では、教育目標分類学や山口大学、立命館大学など他大学の先行事例を参考にして、④「知識・理解」「思考・判断」「関心・意欲」「態度」「技能・表現」の5領域に整理して文言化する、とした。その理由は、総合大学として各種能力をバランスよく育成する必要があると考えたからである。また、初等・中等教育段階の学習評価において、こうした観点別評価が導入されつつあり、それらとAP、CP、DPを円滑に接続させ、一貫性を構築することを意図したからである。／DPは学生にとっての目標であると同時に、教職員や就職・進学先機関にとっては能力判定基準として機能する。そのため、⑤文末の行為動詞は、「習得する」「身につける」といった未来形ではなく、「習得している」「身につけている」のように、卒業段階で達成された状況を示す未来完了形で記載するとよいだろう。(佐藤 [2010b])

- ④「学位授与の方針」とは、学部・学科・専攻が教育活動の成果として「学生に保証する基本的な資質」であり、学位授与の要件を明示するものである。

(全学教学会議 [2009])

(3)カリキュラム・ポリシーとは何か

- ①教育課程編成・実施の方針については、学位授与の方針や教育研究上の目的等との整合性・一貫性を持つことが求められる。また、法制上も、教育課程が体系性を持つことが要請されている。(中略)／かねて我が国の学士課程の教育課程については、科目内容・配列に関して個々の教員の意向が優先され、必ずしも学生の視点に立った学習の系統性や順次性などが配慮されていない、あるいは、学生の達成すべき成果として目指すものが組織として不明確である、などの課題が指摘されてきた。(中略)／多様な科目から場当たりの選択がなされる、あるいは中核となる科目の位置付けが曖昧であるならば、学生の学びは、狭く偏るか、逆に散漫になり、学生の到達すべき学習成果として想定していたものは達成されない。(中略)各大学では、学位授与の方針等の確立と同時に、教育課程の体系的な編成が重要である。開設科目の種類と内容が多様でも、それが学位授与の方針や教育課程編成・実施の方針と遊離せず、学生の体系的な履修が可能となっていることが肝要である。(中央教育審議会 [2008])

②【大学に期待される取組 (抄)】

- ◆学習成果や教育研究上の目的を明確化した上で、その達成に向け、順次性のある体系的な教育課程を編成する (教育課程の体系化・構造化)。

教養教育や専門教育などの科目区分にこだわるのではなく、一貫した学士課程教育として組織的に取り組む。専攻分野の学習を通して、学生が学習成果を獲得できるかという観点に立って、教育課程の体系化を図る。その際、例えば、科目コード(履修年次等に応じて付記)による履修要件の設定や科目選択の幅の制限等も検討する。

- ◆幅広い学修を保証するための、意図的・組織的な取組を行う。

- ◆一方的に知識・技能を教え込むのではなく、豊かな人間性や課題探求能力等の育成に配慮した教育課程を編成・実施する。

例えば、資格取得にかかる教育を行う場合であっても、バランスのとれた教育活動を行う。

教育課程内の活動とあわせて、学生の自主的な活動等の充実に向けた支援に努める。

(中央教育審議会 [2008])

- ③ディプロマ・ポリシーと各授業の到達目標の間には、ディプロマ・ポリシーを保証する体系性と整合性が構築されていなければならない。これがカリキュラム・ポリシーと呼ばれるものである。(沖 [2007])

- ④CPは、DPと整合性のある教育カリキュラムを構築することにより達成されるものとの考えから、あえて明文化していない。(愛媛大学 [2008])

- ⑤それ自体が文章化されるものではなく、DPと整合性のある教育カリキュラムが構築

されることで達成されていると判断されるもの。(小林 [2009])

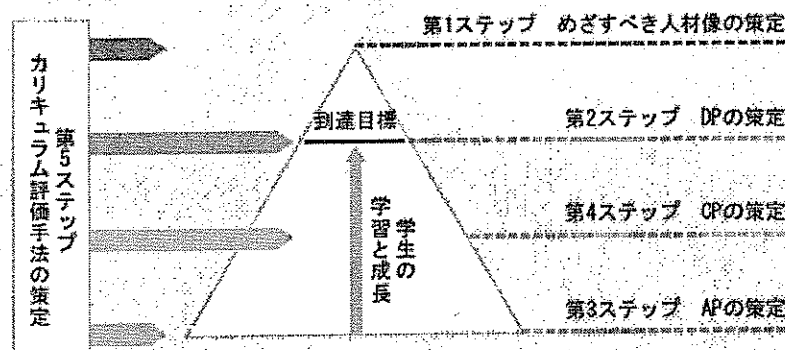
- ⑥「教育課程編成・実施の方針」とは、「各学部の教育理念・目的」、「学位授与の方針」を実現するための教育課程に係る方針のことである。策定にあたっては、体系性や「学位授与の方針」との整合性・適切性に配慮する。／具体的には、「学位授与の方針」に明示した内容について、「学生に保証する基本的な資質」に対応して、それぞれの資質が獲得できる具体的なカリキュラム（プログラム、科目区分・構成、科目、履修順序（配当年次等）の考え方、FD等）を明示する。／（中略）「学位授与の方針」との整合性を確認していくために、「カリキュラム・マップ」、「カリキュラム・チェックリスト」を用いるなどして、可視化・構造化を図り検証する。

(全学教学会議 [2009])

2. 3つの方針の相関関係

- ①ディプロマ・ポリシー (diploma policy、卒業認定・学位授与に関する基本的な方針) が明確であり、それを PDCA サイクル (Plan-Do-Check-Action の略で、教育に関して企画、実施し、その点検・評価に基づいて次の企画に対する改善を図るための体制) の中で実効あるものにするためのカリキュラム・ポリシー (curriculum policy、教育の実施に関する基本的な方針) が機能しているかどうか (沖 [2007])
- ②各ポリシーの策定は、次の手順で進められた。(1)各学部・学科等でDPを設定、(2)各学部・学科等のDPや各授業科目の目標を基に、カリキュラム・チェックリスト(CCL)を作成、(3)各学部・学科等のDPとAPを照らし合わせて既存のAPを見直し、(4)前記(1)～(3)を踏まえたカリキュラムの整備、により一貫性ある「3つの方針」の構築に取り組んでいる。／（中略）一貫性の構築には、DPの策定から着手した。柳澤理事はその理由を「本学ではDPを『卒業時に身に付けていなければならない能力』を示した達成目標と定義し、それを育成するための教育戦略を示すものとしてCPを位置付けている」と説明する。目標実現のためにどのような手段を講ずるかという観点から考えようとすれば、おのずとDPが起点にならざるを得ないというわけだ。(愛媛大学 [2008])
- ③学士課程教育の体系化は次の5つのステップで進めていくとよい(図表)。第1ステップでは、めざすべき人材像を策定する。三角形の頂点を定める作業となる。第2ステップでは、DPを策定する。三角形の頂点と底辺の間に、卒業までに学生が到達することを期待されている水準線(到達目標)を引く作業となる。第3ステップでは、APの策定もしくは見直しを行う。三角形の底辺を定める、もしくは定め直す作業である。第4ステップでは、CPを策定する。底辺を水準線までどのように引き上げるかについての戦略を記す。最後の第5ステップでは、これらの作業がうまく機能しているかどうかを判断するために、カリキュラム評価手法を策定する。(佐藤 [2010a])

図表 学士課程教育体系化の5つのステップ



3. カリキュラム・チェックリスト (CCL) の意義

- ① カリキュラムマップ (観点別に示された学部・学科の教育の目的とシラバスに記載された各授業の到達目標との対応関係を明示したマトリクス)【本学の「カリキュラム・チェックリスト」に相当:安藤注】を用いて、授業科目の精選を進めたり、不足授業科目を補ったりすることによって、学部・学科の教育の目的の達成度を挙証し、カリキュラム・ポリシーの説明責任を果たすことができる。(中略) / 観点別ディプロマ・ポリシーと各授業の観点別到達目標は、カリキュラム・マップという道具を通してカリキュラム・ポリシーに結実する。これは、認証評価における大学教育の質の保証と、学生や保護者、納税者に対する大学教育の説明責任に有効なばかりか、カリキュラム改革や授業改善への合理的な枠組みとしても有効である。 / (中略) ディプロマ・ポリシーを観点別に整理し、ディプロマ・ポリシーを達成するために各授業科目が存在するという発想に基づくならば、カリキュラム・マップを通して、どのような授業科目が必要であり、それはどのような到達目標と内容を具備すべきか、全教員の了解のもと調整が可能であろう。当初は、ディプロマ・ポリシーと授業科目が乖離していても、PDCA サイクルを機能させる中で徐々に調整を進める方法もある。(沖 [2007])
- ② 各学部・学科のDPと各授業の到達目標との整合性の確認は、山口大学・立命館大学などの先行事例を参考に作成したCCLで行う。各授業の目標が、各学科・コースのDPを達成するためにどの程度重要なのか、◎○△の3段階で評価し、CPが達成できているかどうかを判断する。これにより、不足する科目の補充、内容が重複する科目の整理・統合が容易になる。同時に、教員の異動や補充も効率的に行うことができる。教育資源の適性配分、人事の最適化など、組織マネジメントの面からも効果的であるというわけだ。(愛媛大学 [2008])
- ③ 現在の学科等のDPとその教育カリキュラムに存在する各授業の到達目標との整合性を確認し、CPが達成できているかを判断するためのツール。(小林 [2009])
- ④ CCL作成作業の実際
- ・シラバスの書き方に対する反省を構成員に促すことができた。
 - ・シラバスの目的と目標の設定の仕方が、明確になった。
 - ・シラバスの内容をDPの項目に即したものとなるように改訂した。
 - ・教育の成果を挙証する仕組みが理解された。
 - ・各自のシラバスの目標がDPのどれに該当するものか、◎○△を記入するにあたってレベル判断に迷うものがあった。(小林 [2009])
- ⑤ CCL作成作業の課題
- 1) シラバスの到達目標とDP・CCLが対応可能か?
個々の科目のCCL作成のためには、シラバスの到達目標が明確である必要がある。さらに、シラバスの到達目標とDPの表現方法(例えば「5領域」の分類)が一致していることが望ましい。
- 2) DPの到達目標の表現方法をどうするか?
愛媛大学では5領域に分類したが、3領域という選択肢もある。教職員が分類しやすく、学生にも理解しやすい分類方法を採用する。
- 3) 到達目標に対する評価をどの程度まで厳密に行うか?
DPにあまりにも多くの到達目標を設定すると、それらを評価する手間がかかる。しかしながら、評価可能なものだけを記述すると大学の個性・特色を表現するのは困難になる。両者のバランスをとるのは難しいが、DPやAPは一般的なものに、個性・特色はCPで表現するというのが妥当であろう。(小林 [2009])
- ⑥ 「カリキュラム・チェックリスト」とは、「学位授与の方針」に観点(領域)別に記載した「学生に保証する基本的な資質」と「各授業科目の到達目標」との関係(対応)をマトリクスに図式化したもの。(全学教学会議 [2009])

4. カリキュラム・マップ (CM) とコア・カリキュラム、系統的履修モデル

(1)カリキュラム・マップとは何か

- ① 今後は、CCLを基に学生が履修科目を決める際の指針となる「カリキュラムマップ (授業科目関連図)」を策定する計画だ。柳澤理事は「学生が学びの全体像をつかめるようになる。目標に対して今、自分はどこにいるのかを把握することにより、学びの方向付け、動機付けを与えられるのではないかと期待を寄せる。(愛媛大学[2008])
- ② カリキュラムにおける授業科目間の系統性・関係性を図示化したフローチャートやダイアグラムのこと。 (小林[2009])
- ③ 「全体の構造や流れがわかりやすいか」「一目で授業科目同士の関係がわかるか」「興味深く見てもらえ、記憶に留まりやすいか」「学生にとって、自らの学習内容の把握に役立つか」 (小林[2009])
- ④ 「カリキュラム・マップ」とは、「教育課程編成・実施の方針」を達成するために必要なプログラムや科目体系、授業科目の流れや繋がりをツリー化(可視化)したもの。 (全学教学会議[2009])

(2)文学部専攻科目の教育課程概要

- 文学部は、すべての学科・専攻に共通する共同開講科目(仏教の思想、プログラム科目、外国語科目)と各学科・専攻の専攻科目を体系的に配置している。文学部の専攻科目を中心とした教育課程の概要は、次のとおりである。
- ① 普通講義(A・B)は、各学科・専攻の学修を進める上での全般的な知識を教授する。
- ② 特殊講義は各専攻分野の特定のテーマについて、講読は各専攻分野の基礎的な文献について、それぞれ学修することにより各専攻分野の学修の深化をはかる。
- ③ 普通講義・特殊講義・講読の履修成果を各専攻分野の中核的科目である演習に反映させ、学生は卒業論文として学修の成果を集大成する。
- ④ 基礎演習は、高大教育の接続と入門的・基礎教育的意味を持つ。
- ⑤ 演習は、各学科・専攻の学修の総括的意味を持つ。各自の学修テーマに関して担当教員からの指導が行われると同時に、学生同士が議論をすることによって、卒業論文を完成させる重要な授業になっている。 (龍谷大学[2007])

(3)コア・カリキュラム(文学分野)の提言

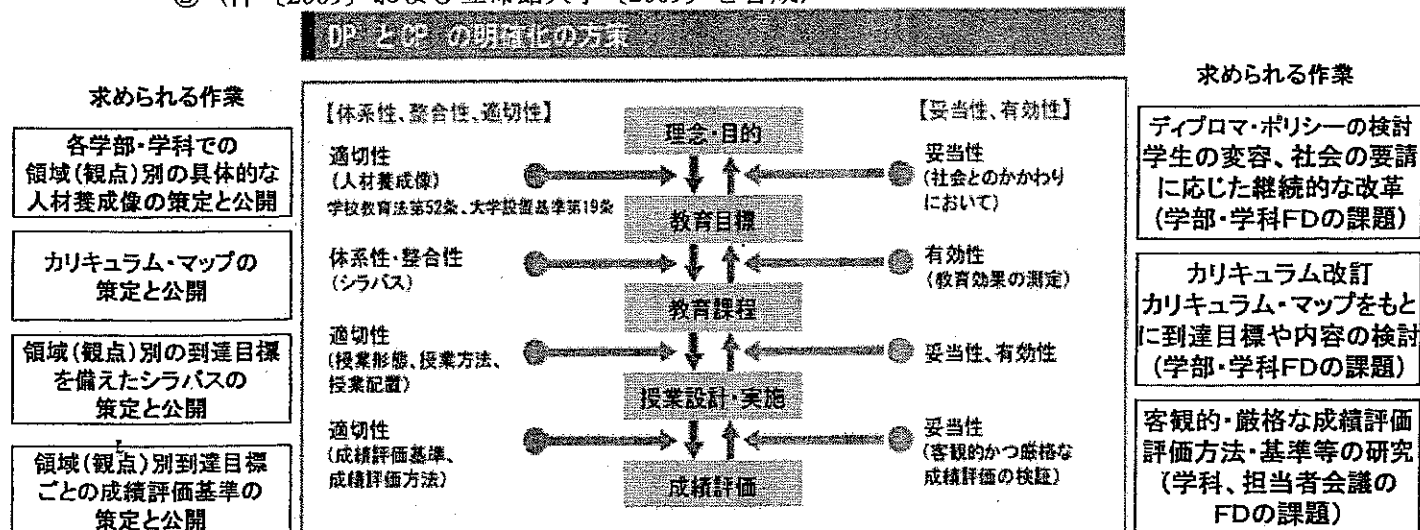
- ① 大学や学部単位において、習得すべき知識、技能、態度等を明確にし、到達目標やそのために必要な授業単位数を定めたもの。 (中央教育審議会[2008])
- ② 1) コア・カリキュラムにおいては、文学部の理念と研究・教育の特色を生かし、人文学的素養を身につけ真に知性と品格をそなえた人間を養成することを目指す。
2) コア・カリキュラムは、文学部の各専門分野(専攻)の垣根を越えた、文学部全学生のための必要最小限の共通カリキュラムとする。
3) コア・下級ラムは、文学部の1年次から4年次までの学部教育全体のなかに位置づけられる。
コア・カリキュラムは次の三つの基本的な柱からなるものとし、それを実現すべき授業科目群をおく。
「思考力・表現力」の養成
「基本的素養」の養成
「総合的視野」の養成 (九州大学文学部[2000])

5. カリキュラム改革のために

- ① 人文・社会系をめぐっては、「学際化」、「自由化」、「多様化」といった傾向が、他の分野以上に顕著となっている。これについては、必ずしも積極的に評価できない面がある(中略)。特に、人文・社会系の教育をめぐっては、かねて教育課程の体系化や

構造化の面での課題(例えば、学習の順次性の欠如など)が指摘されてきた(図表 2-6)。こうした課題解決に向けた取組を欠いたまま、多様な学生の受入を進め、やむを得ず学生の学力水準への対応に迫られたことが、「学際化」等の進行の背景にあるという見方もある。「大学全入」時代を迎え、「入口」の質保証が益々機能しなくなっている中、各分野を通じて教育課程の体系化や構造化を進めていく必要性が高まっているが、現実との懸隔が広がってきている恐れがある。 / (中略) 人文・社会系の学生の授業への要求が低いとは言い切れない。彼らは大学の授業に対して、社会との関わりを明確にすることを望んでいる。 このことは、例えば、従来の我が国の社会科学系の教育が、科学的知識の伝達に偏り、知識の応用や実践、職業との関わりなど、経済社会からの要請に十分対応してこなかったことを見直す必要性を示唆しているとも言える。(中央教育審議会 [2008])

② (沖 [2009] および立命館大学 [2009] を合成)



左側が体系性・整合性・適切性、右側が妥当性・有効性の検証を表す。これらの定性的評価と、志願倍率や就職率などの定量データを照らし合わせながら、組織の業績向上や変容を成熟度として評価する。

【引用・参考文献】

愛媛大学 [2008]: 「ディプロマ・ポリシーを起点に一貫性を構築」(『Between』2008年春号)

沖 裕貴 [2007]: 「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造—理念・目標、ディプロマ・ポリシー、シラバスとの関連において」(『立命館高等教育研究』7)

沖 裕貴 [2009]: 「全学教学会議第1回研修会資料」(龍谷大学、7月3日)

狩野 恭 [2008]: 「ディプロマ・ポリシーを起点にした教育目標を柔軟な組織運営で全学に浸透させる」(『Between』2008年春号)

九州大学文学部 [2000]: 『コア・カリキュラム(文学分野)の研究・開発(報告書)～21世紀の文学部教育に向けて』

小林直人 [2009]: 「全学教学会議第2回研修会資料」(龍谷大学、9月18日)

佐藤浩章 [2010a]: 「学士課程教育体系化のステップ—3つのポリシーの策定と一貫性構築 第1回 組織体制づくりとめざすべき人材像の策定」(『Between』春号)

佐藤浩章 [2010b]: 「学士課程教育体系化のステップ—3つのポリシーの策定と一貫性構築 第2回 ディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシーの策定」(『Between』夏号)

全学教学会議 [2009]: 「学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針の策定に係る「基本方針」について」(龍谷大学、2009年度第2回)

中央教育審議会 [2005]: 「我が国の高等教育の将来像(答申)」

中央教育審議会 [2008]: 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」

立命館大学 [2009]: 「FDの成果を測り教学分野に特化したIRを推進」(『Between』2009年冬号)

龍谷大学 [2007]: 『開発—龍谷大学白書 2006年度』

2-6 分野別にみた学士課程カリキュラム編成の特徴

◆ 4年間の履修の構造化の度合い

* 文系は専門の開始が遅い。 * 文系は学年ごとの構造化が弱い。 * とくに社会系は卒論がない学部が多い。

	人文	社会	理工
1年次で必修の専門教育科目がある	80.4	68.0	88.2
2年次で教養よりも専門の必修の方が多い	52.8	41.6	78.9
特定の学年で単位修得しないと進級できない科目がある	25.8	26.9	54.4
卒業論文・制作がある	73.1	32.7	87.1

◆ 大綱化以降の変化の認識

* 人文系は、学生の選択肢が拡大し、教養教育では履修の共通性が減少し、専門教育は学際的になっている。

* 理系は、補習や導入教育が増加しているが、大学院を視野に入れたカリキュラム編成を考えるようになった。

* 理系では、担当の違いによる教員間の差別が残っているものの、教員間で授業内容で調整を図るようになってきている。

	人文	社会	理工
学生の科目選択の幅が拡大	86.8	79.4	72.2
教養教育に関する学生の履修の共通性が減少	40.2	36.4	31.5
専門教育が学際的になった	61.2	48.2	49.0
教養教育に占める補習や導入教育の比重が増加	23.0	31.1	47.0
大学院教育を視野に入れて学士課程カリキュラムを編成	27.7	23.9	54.3
科目区分の担当の違いによる教員間の差別が残存	19.5	19.5	33.3
教員間で授業内容について調整を図ることが多くなった	55.6	48.9	64.9

◆ カリキュラムの編成方針

* 文系は、学際的に、学生の学力水準に合わせるために、テーマ別科目を多く設定 * 人文は、教養と専門の担当が分化していない。

	人文	社会	理工
専門教育の内容を学際的に (専門教育の内容を高度化)	65.6	64.3	57.0
教養教育はテーマ別科目を多く (教養教育は3系列の科目を多く)	64.4	60.1	52.1
学生の学力水準に合わせてカリキュラム編成 (学部の要求水準を前提にして)	63.9	66.0	54.8
教養と専門教育との担当教員を分ける (どの教員も教養・専門科目を担当)	18.9	45.1	36.7

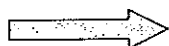
注)上記の数値は、二項対立的な質問のうち、前者を選択した比率。()は対立する質問項目。

◆ 学際化の陥穽

* 人文系・社会系で、「学生の科目選択の幅を増大」、「学生の学力水準に合わせてカリキュラム編成」を方針としているところでは、そのカリキュラムを学際的にすることを考えているところが多い。 * 文系の場合、カリキュラムの学際化は、学生の学力水準にあわせ、選択の幅を大きくすることを意味する傾向がある。

	人文	社会	理工
学生の科目選択の幅を増大 (学生の必修を増加)	67.1 (59.0)	68.2 (54.4)	58.0 (54.3)
学生の学力水準に合わせてカリキュラム編成 (学部の要求水準を前提にして)	72.2 (53.8)	69.6 (53.9)	62.9 (50.0)

注)上記の数値は、二項対立的な質問のうち、前者を選択した比率。()は対立する質問項目。



<文系のカリキュラム編成の特徴>
* 学際化、自由化、多様化 * 構造化が弱い

【調査概要】

実施時期:2003年10月
対象:4年制大学の全学部(1,776学部)
有効回答数:1,000(回収率:56.3%)

【出典】

平成19年12月3日中央教育審議会 大学分科会制度・教育部会及び
学士課程教育の在り方に関する小委員会合同会議
吉田文専門委員発表資料より抜粋

2010年度 文学部のDP・CP(CPIは専攻科目のみ)

観点(領域)	学位授与の方針	教育課程編成・実施の方針
情意	<p>建学の精神</p> <p>○仏教、ことに浄土真宗に基づいた建学の精神、すなわち「平等」「自立」「内省」「感謝」「平和」の意味を深く理解している。</p> <p>○豊かな人間性と高い倫理観をそなえ、社会的責務に対する自覚を持っている。</p>	<p>【全学共通】</p> <p>【文学部】</p> <p>○高い倫理性を培うために、専攻科目としては「倫理学概論」「宗教学概論」「人権教育論」等を通して教育を行う。</p>
	<p>知識・理解</p> <p>○幅広い学問領域について基礎的な知識を持ち、それぞれの領域が持つ見方について説明することができる。</p> <p>○人間社会の根本を見つめるために、「言語(ことば)」の持つ力を深く理解することができる。</p> <p>○テキストの正確な読解に基づいた、人文学の幅広い教養を身につけている。</p>	<p>【京都学舎共通】</p> <p>【文学部】</p> <p>○多面的・総合的な人間理解をめざして、6学科5専攻を設けて、それぞれの学問領域を系統的に学修できるように、1年次から専門科目を配置するなどして体系的なカリキュラムを展開する。また、専攻を置かない学科および哲学科教育学専攻では、学科・専攻内コースを設け、3年次から専門的な学問領域をより深く学修できるようにする。</p> <p>○特に、必修である卒業論文を4年間の学修の集大成として位置づけ、それにむけて各学科・専攻のコアとなる科目群を「普通講義」「特殊講義」「講読」「基礎演習」「演習」に分類して年次指定も含めてバランスよく配置し、人文学の各分野の専門領域を体系的に学べるようにする。</p>
認知	<p>思考・判断</p> <p>○幅広い分野の知識・理解をもとにして、問題に対して多角的な思考、判断を行うことができる。</p> <p>○人間や社会の諸問題について主体的・積極的に判断し、対応できる。</p> <p>○課題の探求、発見、追究、解決という一連のプロセスを達成する能力を身につけている。</p>	<p>○各学科・専攻の学修を進める上での基礎的・一般的な知識や思考を修得するために、概説・概論等を行う「普通講義」科目を開講する。</p> <p>○各学科・専攻の専門分野の基礎的な文献を読解する能力の養成をはかり、それによって人文学の幅広い教養を身につけることができるように、「講読」科目を2年次以降に開講する。</p> <p>○1・2年次で学んだ各学科・専攻の専門分野の基本を踏まえて、さらに学修の専門化・深化をはかるために、特定のテーマを取り上げる「特殊講義」を3年次から開講する。</p> <p>○課題の探求から発見、追究を経て解決へといたる学修のプロセスに必要な作法や知識、あるいは研究方法や思考力を養うために、4年間を通じて「演習」科目を必修として開講する。</p>
	<p>興味・関心</p> <p>○人間とそれをとりまく環境について、探究心を持って具体的な課題設定ができる。</p> <p>○人文学の知に基づいて、人間社会の営みに対する問題意識を持つことができる。</p>	<p>【京都学舎共通】</p> <p>【文学部】</p> <p>○学生自身が明確な問題意識や目標を持って、主体的に履修設計をし学修できるようにするために、フリーゾーン(24単位)を設定するなどして柔軟な履修方法を実施する。</p> <p>○学生の多様な興味・関心を喚起し、学修意欲を促進するために、指定された科目群のうちから決められた数の科目を任意に選択して履修する「選択必修科目」や、どの科目を履修するかはすべて学生の選択に任せられている「選択科目」を開講する。</p> <p>○各学科・専攻の専門領域の基礎的な知識・思考を踏まえて人間社会に対する問題意識を醸成するために、概説・概論等を行う「普通講義」科目を開講する。</p> <p>○人文学の知に基づく問題解決に取り組む姿勢を学ぶために、現場での実習を重視した「臨床心理学実習」「文化財実習」「考古学実習」「博物館実習」や「社会活動ボランティア」等の「実習」系科目を開講するほか、インターンシップ・プログラムも展開する。</p>
情意	<p>態度</p> <p>○多様な価値観を認めつつ、学びを通して自己の認識を広げ、感性を磨くことができる。</p> <p>○外国語を自律的に学習する態度を身につける。</p> <p>○人間社会の諸問題に対して、人文学の知に基づいて積極的に解決しようとする姿勢を持つことができる。</p>	<p>【京都学舎共通】</p> <p>【文学部】</p> <p>○「読むこと」「書くこと」「探ること」「発表すること」等、大学での学びの基本的な方法やツール等を習得し、基礎的学修能力を養成するために、「基礎演習」(1・2年次)を開講する。</p> <p>○学生が自主的に設定した学修テーマに基づく発表とディスカッション、レポート作成等を通じて、課題を追究し、解決へと至る能力を養成するために、「演習Ⅰ」(3年次)および「演習Ⅱ」(4年次)を開講する。</p> <p>○人文学の学修の多様化・高度化を支援し、パソコン等情報機器を活用した調査、データの収集と整理、画像処理、情報発信、文献検索等のスキルを習得するために、「情報教育関連」の科目を開講する。</p>
	<p>技能・表現</p> <p>○英語を媒介とした知的情報の受信、選択、分析、発信を基本とするコミュニケーション能力を実現する。</p> <p>○任意の外国語一つ(英語を除く)について、基本レベルの聞き取り、読み書き、口頭表現ができる。</p> <p>○日本語を正確に理解し、論理的な文章を書くと同時に、自らの見解を分かりやすく伝達するための方法を習得し、実践することができる。</p> <p>○情報及び情報手段を主体的に選択し、活用するための基礎的な知識・技能を習得する。</p> <p>○他者との相互理解を可能とするような対話能力を身につけている。</p>	<p>【京都学舎共通】</p> <p>【文学部】</p> <p>○「読むこと」「書くこと」「探ること」「発表すること」等、大学での学びの基本的な方法やツール等を習得し、基礎的学修能力を養成するために、「基礎演習」(1・2年次)を開講する。</p> <p>○学生が自主的に設定した学修テーマに基づく発表とディスカッション、レポート作成等を通じて、課題を追究し、解決へと至る能力を養成するために、「演習Ⅰ」(3年次)および「演習Ⅱ」(4年次)を開講する。</p> <p>○人文学の学修の多様化・高度化を支援し、パソコン等情報機器を活用した調査、データの収集と整理、画像処理、情報発信、文献検索等のスキルを習得するために、「情報教育関連」の科目を開講する。</p>
FD	<p>文学部においては、「文学部FD活動推進委員会」を設置し、主体的かつ組織的にFDを行い、「FD研究会」の開催などを通じて継続的に教育改善に取り組んでいる。</p> <p>また、毎年度、大学での学びに必要な基本的な作法や基礎知識、参考図書・情報等をまとめた冊子『入門ガイド』を学科・専攻ごとにオリジナルで作成して入学時に学生全員に配付し、「基礎演習」を中心にして副教材的に活用されている。</p> <p>さらに、初年次教育・導入教育のコアとなる科目である「基礎演習」にTA(ティーチング・アシスタント)を積極的に導入するなど、学生の主体的な学びをサポートする体制の構築を進めている。</p>	

2010年6月30日

文学部FD活動推進委員会委員 各位

委員長 安藤 徹

学科専攻別カリキュラム・チェックリストの作成について（依頼）

第3回文学部FD活動推進委員会（2010.06.23）において承認されました標記の件について、下記のとおり、各学科専攻で作業をお進めくださいますようお願い申し上げます。

なお、教養教育科目につきましては、各科目運営委員会において作成することが第4回京都学舎教養科目運営会議（2010.06.18）で承認されておりますことを申し添えます。

記

1. 依頼内容

- (1)各学科専攻の専攻科目を対象に、カリキュラム・チェックリストを作成する。
- (2)作成方法や進め方は各学科専攻の判断に一任する。ただし、以下の点に留意すること。
 - ①原則として、非常勤講師担当分も含めた全専攻科目を対象とする。
 - ②「授業科目の目的」欄は、シラバスの「目的・ねらい」を参照しつつ記入する。
 - ③「授業科目の到達目標」欄は、シラバス内容や授業担当者の設定に基づいて可能なかぎり記入する。
 - ④チェックにあたっては、学部の「教育課程編成・実施の方針（CP）」が一つの判断基準となるが、今回の作業はあくまでも実態（そして問題点）を明らかにすることに主な目的があるため、CPとの整合性が取れない場合でもそのままとする。

2. 提出締切

2010年7月30日（金）までに文学部教務課（担当：巻野）にデータで提出。

3. その他

- ①チェックリストおよびシラバスは各委員にデータとして配付しますので、USBメモリ等を教務課（担当：巻野）にご持参ください。
- ②作成にあたって送料等の費用が生じる場合や事務的なサポートが必要な場合等は、事前に文学部教務課にご相談ください。
- ③作業過程で浮上した問題点（作業そのものの問題を含む）は、FD研究会で取り上げる予定です。

以 上

《この件についての問い合わせ先》

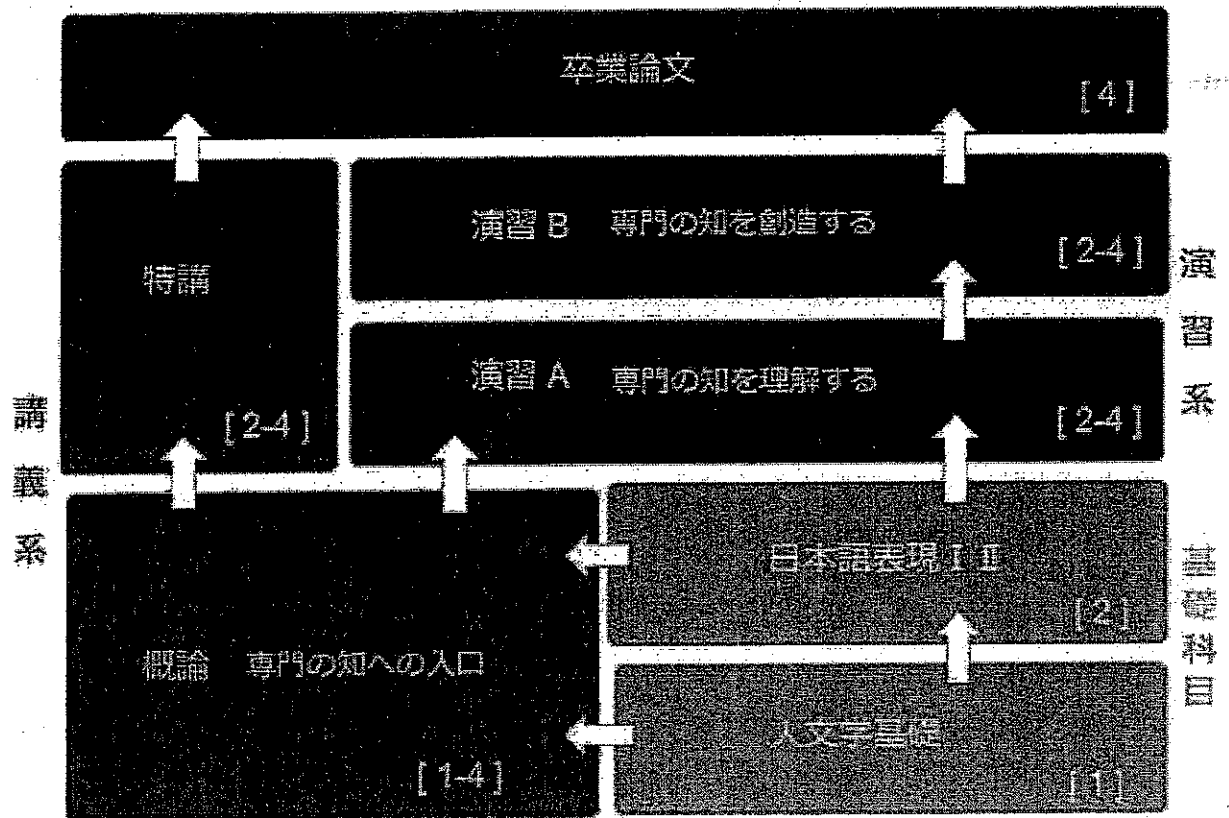
委員長（安藤）内線：5208 Email：tando@let.ryukoku.ac.jp

文学部教務課（巻野）内線：5014 Email：makino@ad.ryukoku.ac.jp

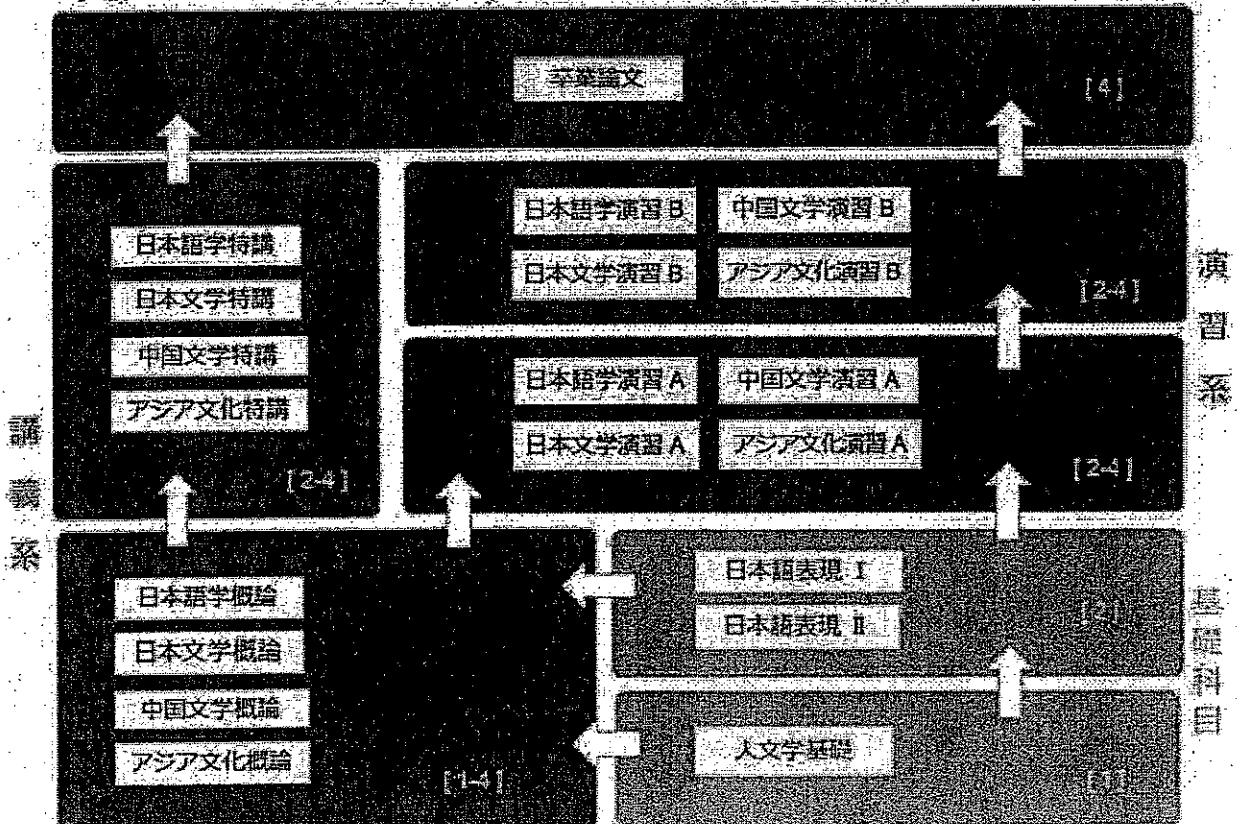
カリキュラムとGraduation Policy (DP)との相互関係図表一覧表

学年	科目名	授業科目の概要	到達目標	到達目標の達成状況	到達目標の達成状況
1年次	日本語文化論Ⅰ	日本語文化論Ⅰの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅰの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
2年次	日本語文化論Ⅱ	日本語文化論Ⅱの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅱの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
3年次	日本語文化論Ⅲ	日本語文化論Ⅲの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅲの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
4年次	日本語文化論Ⅳ	日本語文化論Ⅳの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅳの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
5年次	日本語文化論Ⅴ	日本語文化論Ⅴの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅴの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
6年次	日本語文化論Ⅵ	日本語文化論Ⅵの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅵの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
7年次	日本語文化論Ⅶ	日本語文化論Ⅶの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅶの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
8年次	日本語文化論Ⅷ	日本語文化論Ⅷの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅷの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
9年次	日本語文化論Ⅸ	日本語文化論Ⅸの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅸの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○
10年次	日本語文化論Ⅹ	日本語文化論Ⅹの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	1. 日本語文化論Ⅹの概要(歴史・発展)を説明し、その発展の経緯を考察する。	○	○

1 専攻コース



5 専攻コース（言語文化 アジア系 コース） 開講科目一覧



文学部 FD 研究会
カリキュラム・チェックリストの効用と課題
— 学生が“学び”を実感できる教育の実現をめざして (1) —

報告資料

- 1) カリキュラム・チェックリスト (CCL) 作成の方針…… 資料-①、②
- 2) カリキュラム・チェックリスト作成に関わる
教員アンケートの結果について… 別添アンケート集計
- 3) CCLの問題点と今後の展望 (ディスカッション)

2010（平成22年）年5月28日

「カリキュラム・チェックリスト（仮称）」の作成について（提案）

1. 提案趣旨

「3つの方針」については、昨年度の第3回全学教学会議（2010.3.12開催）で承認され、すでに学内外に公表した。今後は、これが本学の教育内容・方法等の改善に資するものとなるよう、更なる検討を加えることが必要であると考えている。

とりわけ、「3つの方針」策定に係る基本方針を承認した第2回全学教学会議（2010.10.22開催）では、「教育課程編成・実施の方針」にかかわって、「学位授与の方針」との整合性を確認していくために、「カリキュラム・マップ」「カリキュラム・チェックリスト」を用いるなどして、可視化・構造化を図り検証する」ことが確認されている。ついては、これに伴い検討を進めることを提案する。

2. 提案事項

- (1) 各授業科目の到達目標と、「学位授与の方針」に基づく「学生に保証する基本的な資質」との関係性を明確にするため、これらをマトリックスで示す「カリキュラム・チェックリスト（仮称）」について、全科目を対象に作成（公表については別途検討）すること。
- (2) 科目区分に応じて責任を持つ教学主体等が、「学生に保証する基本的な資質」の観点別領域に基づき、9月末までに作成すること。
- (3) 「カリキュラム・チェックリスト（仮称）」の様式については別紙のとおりとすること。

3. 「カリキュラム・チェックリスト（仮称）」作成後の検討課題

「カリキュラム・チェックリスト（仮称）」により、「学位授与の方針」に基づき設定した「学生に保証する基本的な資質」を、具体的にどの授業科目で保証するのか明確にすることが可能となる。こうした検討を通して、「カリキュラム・チェックリスト（仮称）」が教育内容・方法等の改善に資するものとして機能させることが重要である。今後検討を要するものとして、次のような課題を設定し、引き続き検討を進めていく。

- (1) 教学主体等が行う自己点検・評価活動を通じ、各授業科目の到達目標と「学生に保証する基本的な資質」等の適切な関係性を評価することとし、必要に応じてカリキュラム改革等を実施する。
- (2) 各授業科目の到達目標と「学生に保証する基本的な資質」の関係性を示すシラバス項目を新たに追加することを検討する。また、シラバスを通じて学生に対する科目履修の目的や当該科目を履修することによって培われる「学生に保証する基本的な資質」を明示する。
- (3) 各授業科目で培われる観点別領域ごとの「学生に保証する基本的な資質」を踏まえた成績評価のあり方などを検討する。

以上

文学部FD委員の先生方

文学部カリキュラム・チェックリストに関わるアンケートのお願い

すでにご承知の通り、今年度第1回の文学部FD研究会が、10月27日（水）16：30～18：00の日程で開催される予定となっております。今回のFD研究会では、先般ご協力いただきましたカリキュラム・チェックリストに関わって、その効用と課題がテーマとなっております。そのため、今回カリキュラム・チェックリストにご協力いただいた先生方にアンケートをお願いし、FD研究会での議論に活用いたしたいと存じます。今回のアンケートはFD委員の先生方を対象とさせていただきますが、それぞれの学科専攻でご意見をとりまとめていただいても結構です。校務ご多忙の折とは存じますが、10月15日（金）までに大宮文学部教務課 担当：巻野に提出くださいますようお願い申し上げます。

なお、カリキュラム・チェックリストの作成については、下記の申し合わせのもとにご依頼しておりました。これについても、ご意見等ございましたらお聞かせいただきたく、重ねてお願い申し上げます。

記

1. 依頼内容

- (1) 各学科専攻の専攻科目を対象に、カリキュラム・チェックリストを作成する。
- (2) 作成方法や進め方は各学科専攻の判断に一任する。ただし、以下の点に留意すること。
 - ① 原則として、非常勤講師担当分も含めた全専攻科目を対象とする。
 - ② 「授業科目の目的」欄は、シラバスの「目的・ねらい」を参照しつつ記入する。
 - ③ 「授業科目の到達目標」欄は、シラバス内容や授業担当者の設定に基づいて可能な限り記入する。
 - ④ チェックにあたっては、学部の「教育課程編成・実施の方針（CP）」が一つの判断基準となるが、今回の作業はあくまでも実態（そして問題点）を明らかにすることに主な目的があるため、CPとの整合性が取れない場合でもそのままとする。

2. 提出締切

2010年7月30日（金）までに文学部教務課（担当：巻野）にデータで提出。

3. その他

- ① チェックリストおよびシラバスは各委員にデータとして配付しますので、USBメモリ等を教務課（担当：巻野）にご持参ください。
- ② 作成にあたって送料等の費用が生じる場合や事務的なサポートが必要な場合等は、事前に文学部教務課にご相談ください。
- ③ 作業過程で浮上した問題点（作業そのものの問題を含む）は、FD研究会で取り上げる予定です。

以上

2010年度 カリキュラム・チェックリスト作成に関わるアンケート集計

設問1

今回のカリキュラム・チェックリスト作成は、先般策定されました3つのポリシー(DP・AP・CP)とカリキュラムを有機的に結びつけ、さらに学部全体のカリキュラムマップの作成を通じて、カリキュラムの改善を図ることを目的としていますが、作業工程は適切だったと思われますか。

- | | |
|-----------|----|
| ① 強くそう思う | 0名 |
| ② そう思う | 2名 |
| ③ あまり思わない | 5名 |
| ④ 改善すべき | 1名 |
| ⑤ 無回答 | 1名 |

設問2

上記で③・④を選択された方にお聞きします。あまり思わない、改善すべきであると考えられる理由を、具体的にお聞かせ下さい。

●「現在のカリキュラムの問題点について、検討すべし」との問いかけから始めるべき。根本的な問いかけから、新たな「ポリシー」理念にもとづくカリキュラム構築の方向性を探究し、現行開設開講している科目の現状を点検する。

●CCLとCM(カリキュラムマップ)は3つのポリシー策定に先んじて行うものであり、その点では、今回のCCL作成は手順が逆転している。今後、CCLの作成においてCPがどのような位置を占めるのかなどの検討が必要。

●CCLのチェック項目とシラバスの項目が対応しない。シラバスをCCLに対応させることが必要。

●3Pは専任・特任教員が意識すべき。非常勤教員の担当科目の記入の必要性は低い。

●学科専攻で統一した方法がとれず、対応に苦慮した。

設問3

今後のカリキュラム・チェックリスト作成についてお聞きします。チェックリストの作成は、どのような方法が相応しいと思われますか。

- | | |
|---------------------------|----|
| ① 学科専攻の代表者が作成する | 1名 |
| ② シラバス入稿の際にそれぞれの担当者が作成する | 5名 |
| ③ シラバス入稿の際に教務課が集計してとりまとめる | 0名 |
| ④ 独自に教務課が作成する | 0名 |
| ⑤ その他(具体的にお聞かせ下さい) | 3名 |
| ⑥ 無回答 | 1名 |

●3Pの重要度(◎、○)を学科専攻で設定し、授業担当者に告知して、シラバス記入時などに、「授業科目の目的・到達目標」の記入を教学部から依頼するという順序が妥当。

●各科目の現状・開講目的、到達目標などについては終わっているため、あらためてのチェックリストの作成は必要ない。

●授業科目の目的(原案)は、学科専攻会議などがカリキュラム全体を視野に、シラバス原稿に記載し、シラバス入稿の段階で、各担当者が到達目標を設定、チェックする。学科専攻会議などで到達目標とチェック内容を確認し、最終調整を行う。

設問4

今回のカリキュラム・チェックリスト作成では、文学部専攻科目すべてをその対象としましたが、チェックリスト対象科目として適切だと思われますか。

- | | |
|-----------|----|
| ① 強くそう思う | 1名 |
| ② そう思う | 3名 |
| ③ あまり思わない | 2名 |
| ④ 改善すべき | 2名 |
| ⑤ 無回答 | 1名 |

設問5

上記で③・④を選択された方にお聞きします。あまり思わない、改善すべきであると考えられる理由を、具体的にお聞かせ下さい。

- 非常勤教員担当科目は外した方がよい。
- 諸課程科目は、除外すべき。
- 全ての科目について実施するなら、オーソライズされた外国語版(英語)も用意すべき。

設問6

チェックリストには、シラバスとの関連性を持たせるために、「授業科目の目的」欄と「授業科目の到達目標」欄がありました。チェックリストとしては、項目を1つにまとめる方法もあると思われませんが、別項目にするのが適切であると思われませんか。

- | | |
|----------------------|----|
| ① 強くそう思う | 0名 |
| ② そう思う | 3名 |
| ③ 適切ではないので項目を統一すべき | 3名 |
| ④ 適切ではないのでシラバスを変更すべき | 2名 |
| ⑤ 無回答 | 1名 |

設問7

上記で③・④を選択された方にお聞きします。適切ではない、変更すべきであると考えられる理由を、具体的にお聞かせ下さい。

- 目的と到達目標は、殆どの場合、同内容となるはず。
- シラバスの「目的・ねらい」と「到達目標」とは別物。「目的」は一定期間内に達成することを要請されていないものであり、「到達目標」は達成可能目標として設定される。基本的に両者は異なるもので、現状では両者を区別してCCLに記述するのは困難。
- 各科目担当教員のねらいなどについて、教務委員が判断しにくい面がある。
- シラバスや講義内容との関係で、二つに分割することが困難な場合が想定される。
- 現行の「ねらい・目的」欄を「目的」と「到達目標」とに分け、「目的」はあくまでもカリキュラム上の「存在意義」や「目的」を記し、「到達目標」はより具体的な目標を明示すればよい。

設問8

チェックリストのチェックのつけ方についてお聞きします。今回は、「学生に保証する基本的な資質」について、特に重要なものには◎を、重要なものには○を記入していただきましたが、適切であると思われませんか。

- | | |
|-----------|----|
| ① 強くそう思う | 0名 |
| ② そう思う | 1名 |
| ③ あまり思わない | 3名 |
| ④ 改善すべき | 3名 |
| ⑤ 無回答 | 2名 |

設問9

上記で③・④を選択された方にお聞きします。あまり思わない、改善すべきであると考えられる理由を、具体的にお聞かせ下さい。

- 「重要なもの」と「特に重要なもの」との区別が極めて判断が難しい。「重要なもの」ひとつに統一した方がよい。
- ◎と○は、どちらかに統一する。リストから「向上目標」は削除する。「向上目標」が該当するなら、「達成目標」も該当するから。
- 異なる科目間で◎と○を比較してもあまり意味がないように思われる。チェックリストを作成する際、◎と○の区別は困難。
- 講義担当者が保証しようとすることを、各々に聴取する必要があり、時間を要する。
- チェックの基準が曖昧であり、判断に苦しむ場合が多い。3P自体を改善した方がよい。
- ◎または○をつける数に制限を設けるなど、一定の目安を設定したほうがチェックしやすい。

設問10 チェックリストの「学生に保証する基本的な資質」のうち、認知的領域についてお聞きします。具体的な授業科目から見て、文学部のDPを構成する項目として適切であると思われるか。

- | | |
|-----------|----|
| ① 強くそう思う | 0名 |
| ② そう思う | 3名 |
| ③ あまり思わない | 5名 |
| ④ 改善すべき | 0名 |
| ⑤ 無回答 | 1名 |

設問11 上記で③・④を選択された方にお聞きします。あまり思わない、改善すべきであると考えられる理由を、具体的にお聞かせ下さい。

- 「認知」という概念は多義的で、資質の項目として設定することに難点がある。
- 向上目標の「人間や社会の諸問題について主体的・積極的に判断し、対応できる。」と技能的領域との関係について、判断に迷う。
- 担当者により差が生じる。
- 「人間や社会の諸問題について主体的・積極的に判断し、対応できる」項目は、カリキュラムの実態と乖離した設定になっているのではないか。「人間社会の根本を見つめるために、「言語(ことば)」の持つ力を深く理解することができる」は、「人間社会の根本を見つめるために」という部分がチェックし難い要因か。

設問12 チェックリストの「学生に保証する基本的な資質」のうち、情意的領域についてお聞きします。具体的な授業科目から見て、文学部のDPを構成する項目として適切であると思われるか。

- | | |
|-----------|----|
| ① 強くそう思う | 0名 |
| ② そう思う | 5名 |
| ③ あまり思わない | 3名 |
| ④ 改善すべき | 0名 |
| ⑤ 無回答 | 1名 |

設問13 上記で③・④を選択された方にお聞きします。あまり思わない、改善すべきであると考えられる理由を、具体的にお聞かせ下さい。

- 何とも判断しがたいというのが正直なところ。情意的領域には、学問をする上での「倫理性」なども重要ではないか。知識や技能を活用する際、社会的責任を持ち、社会に貢献するという側面も必要。
- 「人間社会の諸問題に対して、人文学の知に基づいて積極的に解決しようとする姿勢を持つことができる」項目が抽象的すぎる結果として、チェックし難い事態が生じた。

設問14 チェックリストの「学生に保証する基本的な資質」のうち、技能表現領域についてお聞きします。具体的な授業科目から見て、文学部のDPを構成する項目として適切であると思われるか。

- | | |
|-----------|----|
| ① 強くそう思う | 0名 |
| ② そう思う | 6名 |
| ③ あまり思わない | 2名 |
| ④ 改善すべき | 0名 |
| ⑤ 無回答 | 1名 |

設問15 上記で③・④を選択された方にお聞きします。あまり思わない、改善すべきであると考えられる理由を、具体的にお聞かせ下さい。

- 学生の能力と担当者の希望との差を埋める必要がある。

設問16

今回のカリキュラム・チェックリスト作成において、特に問題だと思われたことがありましたらお聞かせ下さい。

- 自身の担当科目以外の科目は、チェックが困難。担当者が各々の担当科目についてチェックするのが望ましい。
- 全科目について行ったのはよかったが、順序が逆であった。今後は、カリキュラム構築へ向けての議論に進むべき。
- 授業担当者がチェックする場合と第三者がチェックするのでは違いが出るのが最大の問題。カリキュラム・チェックリストを反映したシラバスが必要。
- 「学生に保証する基本的な資質」という用語に違和感がある。
- 講義担当者にシラバス提出時と採点時に確認できれば、FDで改善点や問題点を考える材料になる。
- 授業担当者に“丸投げ”する形での目的・到達目標の設定およびチェック作業は、問題のあぶり出しをするうえでは意味があったが、最善の方法ではない。目的・到達目標の設定も統一性がなく、チェック内容も単純には比較できないものになった。到達目標を具体的に記述すべき。抽象的な到達目標と、抽象的な「基本的な資質」との対応をチェックするのは、きわめて困難。
- 責任部署の長名で、龍谷大学として何に取り組み、CCLがどのような意義を持っているのかを明記した依頼文が欲しい。非常勤の先生に依頼する際、誤解や不信感、憶測、混乱を招いた。

設問17

今回のカリキュラム・チェックリスト作成作業全体に関わって、ご意見ご提言などありましたらお聞かせ下さい。

- CCLの内容を、学生にどのように知らせるのか？CCL作成の効果など、作成後について共通の理解がないままスタートしたため、極めて曖昧なチェックになったのではないか。
- カリキュラムの問題点などを指摘した上で、CCL作成作業をすると、より効果的。
- CCLの内容をシラバスで確認できるのが理想。CCLをより厳密に作成するため、授業担当者に問い合わせざるを得なかった。CCLは授業担当者が作成し、学部・学科の系統的なカリキュラムを再構築してはどうか。誰がCCLを作るのか基準が必要。
- 改めて「達成目標」「向上目標」を整理し、依るべき基盤を再確認できた。同一科目でCCLの文章が違いすぎる。項目数や基本的内容について、調整が必要。特に、卒業論文の意義は、共通した意義が存在するはず。ゼミに対する基本的認識の共通性や、教員の個性が容易に見分けられるように、形式・内容を整理してはどうか。基礎演習・講読・概説などが有機的に機能しているかどうか、この機会にチェックした方がよい。
- 用語・表現・文体は基準を設け、各科目の到達目標が過剰になりすぎないように留意すべき。同一科目内のチェック内容の不統一について、カリキュラム全体を視野に入れ、評価・修正・改善する方法を検討すべき。「到達目標」や「学生に保証する基本的な資質」を、全教員が理解することが重要。CCL作成作業が今後、活用され、益するものになるよう、実際上の改善・改革が可能になった事例を集約して発信。